

教師が語るひとり親世帯

(平成29年11月27日 受理)

人文社会系 東野 充成

Exploring Single-Parent Families from Teacher's Perspective

(Received November 27, 2017)

Kyushu Institute of Technology Mitsunari HIGASHINO

School education is expected of support for children of single-parent families. However, very little is known about teacher's perspective on single-parent families. For this reason, the fundamental purpose of this paper is to develop an understanding of single-parent families from teacher's perspective.

The result of research clearly shows following points. (1)Teachers recognize that parents of single-parent families have strong interest of child's education. (2)However, teachers have problem consciousness about establishment of a basic living habit of children. (3)Teachers feel that cooperation between school and welfare institution is very difficult.

1. 本研究の問題と目的

(1) 社会的排除と学校

もとより学校教育は社会政策を実施する機関ではないが、同時に社会的排除の解決に向けて大きな役割を果たしうる機関でもある。学力を保障することは貧困の連鎖から抜け出す大きな一助となり得るし、有料の外部の機関をなかなか利用しづらい子どもたちにとっては、学校は、人間関係を形成し、様々な参加の機会を得られる重要な場である。こうした観点から、教育社会学における社会的排除論においても、学校や教師に着目した研究が近年なされるようになってきた。

盛満(2011)は、「特別視をしない」学校文化の存在が貧困の問題が学校の中で立ち現れてこなかった背景と指摘している。また、日本教育社会学会では、子どもの貧困問題を課題研究として複数年にわたって取り上げた。第67回大会では子どもの貧困に教師はどう向き合えるのかというテーマで討論が行われたが、その際油布(2015)は、教職課程の学生を対象とした調査をもとに、貧困の問題をなぜ教師は見ようとしないのか

という問いに対して、個人化という社会意識、現状追従型意識、教科に特化した専門家へ歩もうとする意識の存在をあげている。また、同じく長谷川（2015）は、生活困難層が多く居住する地域を対象としたフィールドワークをもとに、生活困難層を学校の困難の原因とみなす視点や生活困難層の抱える問題を直視しない視点が現在も息づいていること、しかし近年では相手の個別具体性に応じて自らの観点や基準を変化させようというスタンスも見られること、それでもなお教育が有する主体性志向のためにその姿勢が徹底されないことなどを指摘している。

以上のような研究を総括すると、どうも学校は子どもの貧困問題に対して無力であるようだ。長谷川（2015）が指摘するように、生活困難層の子どもや親を学校や教師が見下すような視点をもっているなら、無力というよりも、むしろ有害ですらある。しかし、逆にいうと、一連の研究で指摘されるような、子どもの貧困問題を解決する上での阻害要因(学校文化、教師の意識、教育に内在する志向など)を除去していけば、学校はその解決に大きな役割を果たしうる可能性をもっているということである。その意味で、社会的支援の結節点としての学校の役割を検証することの重要性は揺るぎない。

目立ちはしないが、学校現場が子どもの貧困問題に真摯に向き合い、その解決の一助となってきた事例もある。たとえば、新潟県高教組がおこなっている「希望奨学金」という取組みである。この取組みはもともと、主任制度に反対する組合活動から始まった。すなわち、主任手当として県から支給された給与を組合が取りまとめ、貧困家庭の高校生に給付する(貸与ではなく)というものである。詳細は小船井（2009）に譲るが、学校現場が貧困と向き合ってきたことを示す貴重な取組みである。

(2) 分析の方法

本研究では、現に教育実践に携わっている現役の教師を対象にインタビュー調査を行い、ひとり親世帯や生活保護に代表される子どもの貧困問題に対して、彼らがどのような認識を有しているのか、また実際にどのような実践を行っているのかを分析する。それを通して、教育現場からの貧困問題に対する社会的支援のあり方を明らかにすることが本研究の課題である。

インタビューの対象としたのは、主に低学力の生徒が集まる高校の教師である。もちろん、高い学力をもった生徒が集まる高校にも、貧困に苦しむ子どもは多数いるだろう。しかしながら、諸種の先行研究を概観すると、やはり学力と家庭の経済的基盤は連関しているようである。実際、「希望奨学金」の事務に携わる小船井（2009）も、「いわゆる『進学校』とされる学校からの応募は少なく、『教育困難高』と位置づけられている学校からの応募が非常に多い」（94頁）と述べている。そうであれば、低学力の高校の教師ほど、子どもの貧困の問題がよりビビッドな課題として立ち現れてくると考えられる。

また、高校は多くの生徒（特に低学力の）にとって、自立に向けて何らかの決断を下す最初の段階である。そのため、貧困の連鎖を防ぐという意味でも、その役割は非常に大きい。こうした観点から、本研究ではインタビュー対象者を選定した。インタビューに応じてくださった先生方の簡単なプロフィールは、下記の表のとおりである。なお、人名・高校名等の固有名詞はすべて仮名である。

【表】 インタビュー対象者のプロフィール

	所属高校	教職経験年数	性別	年代
窪田先生	公立工業高校 (九州地方)	3年	男性	20代
篠山先生	私立工業系高校 (九州地方)	4年	男性	20代
中町先生	私立福祉系高校 (九州地方)	12年	女性	30代
高川先生	公立工業高校 (近畿地方)	5年	男性	20代

インタビューは半構造化面接の手法によったが、大まかには以下のような点について質問した。インタビューはすべて録音し文字起こしを行った。以下はこの資料を用いて分析を進める。

- 学校・学級・部活動・その他の職務の現在とそこでの子どもの様子。
- ひとり親世帯等の子どもの成績・進路・性格・行動。
- ひとり親世帯等の子どもに対して気を付けていることや対処方針。
- ひとり親世帯等の親に対して気を付けていることや対処方針。
- ひとり親世帯等の何が問題だと感じるか、またそれに対してどう臨んでいるか。
- ひとり親世帯等に対する社会のあり方や課題。
- 教員としてのプロフィール。

2. 教師が語るひとり親世帯

(1) 子どもと教育への関心

ひとり親世帯の問題としてよく取り上げられるもののひとつに、教育への無関心や子

育てにかかわる時間が少ないことなどがある。しかしながら、図らずも、インタビューした教師たちが感じている、ひとり親世帯の高校生及び親に対する印象はそれとは真逆のものであった。むしろ、甘やかされている、親が過剰に干渉するという印象をひとり親家庭の親に対してもっている。窪田先生は次のように述べている（以下の引用文中、括弧内は筆者の発言や補足）。

割とどちらかという、わがままに育てているっていうのはありますよね。（あ、わがままに育てている。なるほどね）。そのわがままに育てているという分はすごく…。家庭というのはいろいろあると思うんですけど、そのうちの一人はお父さんともよくあっているらしいんですよ。なので、お父さんのほうが母親に預かってもらっている分ちょっと甘やかしている部分があるんじゃないかなとは思っている子が一人はいます。一回その子は喫煙で（生徒指導上の問題に）挙がったんですけど、たばこはお父さんからもらいましたみたいなこと言っていたので、お父さんもお父さんらしいことじゃないですけど、それなりに親として何かやろうかなみたいなのがあったんじゃないかなと。

また、高川先生も次のように述べている。

僕の主観なんですけど、カップル感覚というか、お母さんにとって子どもが彼氏みたいなんじゃないんですけど、甘やかしちゃっているんですよ。全員が全員そういうわけではないんですけど。三者面談すると、接し方が全部お母さんが手を出しているみたいで。

そして、こうした態度は教育に対する姿勢にもあらわれているという。以下は窪田先生の発言である。

（ある部活動の）子どもに関しては、母親で育てているから、母親はこういう試験をとっておきなさいとよく言われることは聞きますね。（中略）まあ、資格があると生活ができるというのがあるから、よく聞くのがお母さんがというのはやっぱり言いますよね。

また、高川先生は次のように述べている。

母子家庭のお母さんは、子どもにはいいところに行ってほしい。でも、お母さんに

はお父さん（配偶者）がいないので、職場を知らないで、職場のリサーチなんかかけていて、あの会社はどうだとか…。それが結構だから、僕らがここがええよとか言っても、ここはちょっと厳しいらしいですとか、結構その影響を受けるので、お母さんのリサーチがどこまで信用できるのか知らんですけど、口コミとか。

このように、ひとり親家庭の親といっても必ずしも教育に対して無関心であったり、放棄したりしているわけではない。むしろ現場の教員が感じているのは、ひとり親家庭の親だからこそ、子どもに甘く、教育に熱心であるという感覚である（ただし、それとは逆に、篠川先生や中町先生は、「家での会話がなないので、三者懇談でもめることが多いです」とも述べており、子どもへのかかわり方が二極化している様子がうかがえる）。

（2）基本的な生活習慣の未確立

しかし、ここで言う教育への関心とはあくまでも、資格や就職など学校を通して得られる何かであり、学問や教養そのものへの関心、あるいは基本的な生活習慣の確立やしつけへの関心ではない。むしろ教師たちは、しつけやマナーへの関心の薄さを子どもに甘いということの裏返しとして感じ取っているようだ。

問題行動が起きるとやっぱり、保護者と密に（連絡を）取りますし、遅刻した瞬間に、連絡もなかったら保護者にすぐ電話しますから、頻繁に遅刻する子に関しては、よく連絡がたって、こういう状況（子どもと保護者が連絡を取り合っていない状況）になったんですというのは聞きます。（中略）最近、別の子の1年生で、保護者と会わないって言ったんですよ。家は一緒に暮らしてるんですけど、時間帶的に合わない、っていう子がいるんですよ。（窪田先生）

（ある部活の引率で合宿に行つて）飯のとき、その食堂で晩御飯を手配してもらったのもあって、僕らは、ご飯を食べるときに、できたての白飯を食べるよつて指示でいただきますし、そのあと、テーブルで6人掛けぐらいで、飯で遊びよるんですよ。すつごいそれが一番不愉快で、たくさん食べるよつて言ったから、あほみたいにくちやくちやつて。それで、嫌いなものをこつやつてやつたりとか。ドレッシングを揚げ物なんかにかけたりとかで、「うわ、もう食べられへんやんか」つていうやりとりが、（自分の）周りでは絶対にありえへん。両親おつても品行はわからないですけど、たぶん、それに関しては家庭教育（が行き届いていない）だろ。（高川先生）

高川先生も述べているように、両親がそろつていても「品行」に問題のある子どもは

多い。その一方で、先の「甘やかされている」という言説とつなぎ合わせるなら、親との連絡や時間を守ること、食事のマナーといった基本的な生活習慣の部分で、ひとり親世帯の子どもに問題が多いと感じていることがわかる。同じく篠川先生も、「基本的に欠席とかの連絡がないんで、家庭訪問するしかないんですよ」と述べている。これらの言説は、ひとり親世帯の子どもが基本的な生活習慣を確立していない場合、ひとり親世帯だからという属性に帰責されてしまう危険性を示している。

(3) 経済的問題と職業観

一方、ひとり親世帯における貧困の問題についてはどうだろうか。盛満（2011）が明らかにしたように、学校において貧困の問題は不可視化されやすい。しかし、教師の印象レベルや教師間のインフォーマルなネットワークのレベルでは、ひとり親世帯の貧困の問題は学校教育にも少なからず影響を与えているようだ。

実際に教科書が買えなかったり、校風でもあると思うんですけど、部活が盛んだったり、母子家庭でもみんな一生懸命やるんですけど、いま、わが学校ではアルバイトが原則禁止なんですね。でも、いま、バイトについて、やっぱり貧しい人いるので、結果をめぐってトラブルを起こしても、明確な線引きができないじゃないですか。仮に、親に子どもがしたいからといわれても、一応はねるんですね。やっぱりバイトなんかせずに、部活や勉強したりって言うんですけど、親が来て、「苦しいのですので」って。苦しいって言われても、どんだけ苦しいかって額をちゃんと聞きますよ。理由を。そしたら、学業に差し支えない範囲でって。そしたら、担任と学年主任とで当たったり、面談したりとかってなるので、そういう家庭の背景をみることは増えましたね。（高川先生）

三学期とかで、「やっぱり金がないんで進学できへんらしいから、就職しますわ」って、学校としてはめっちゃ困りますやん。で、何を言ってるのってすごいトラブったらしくて。それは、ひとつは基本その子どもの職業観が低いというのがありますけど、親子で連携が密じゃない、家庭によっては。（高川先生）

窪田先生の勤務する学校では、いまのところ、経済的な問題は起こっていないという（少なくとも窪田先生の知る、かかわる範囲では）。しかしながら、高川先生の経験に即する限り、ひとり親世帯の経済的な問題が日ごろの学校生活や進路に大きな影響を与えていることがうかがえる。

ここで高川先生は「職業観」という言葉を用いているが、高川先生の所感では、ひと

り親世帯の子どもは職業観に大きな問題を抱えているようである。以下は、高校生の就職活動の在り方に関して、高川先生が抱えている疑問である。

知り合いのところで雇ってくれるらしいですとか、じゃあ、もう地元のってみたいなのを頼っていくとか、それでいいみたいな感じなのね。「いやー、車好きなんで、(カー用品店)でええかなと思ってます」とか。(カー用品店)なんか、えーって。地元のおっちゃんがいいよって言ったからそこでいいかな、とか。いやいやふざけんよ、みたいな。

もちろん、縁故就職そのものが悪いわけではない。高川先生が心配しているのは、特に貧困世帯に暮らす高校生が社会における労働の仕組みを理解せずに、貧困が再生産されていくことである。

自分がそのすごい末端の労働者になることとかはわかっていない。社会の構造も仕組みも知らないまま、いつ気づくのかなって。だからといって、必死に勉強するわけでもないの、楽なほうへ楽なほうへ流れて。もうちょっと頑張っている大学とかに入ってとか思うけど、そういう展望とかないわけですよ。(中略)貧困層で育つてくると、その辺の目先のお金に厳しいのがあるんですよ。

貧困はお金そのものがないことよりも、お金の使い方を教わってこなかったという点に問題の本質があるという意見もある。高川先生が心配しているのも、こうした意見に類似するものだろう。就職を成功させることが進路指導の主課題となる工業高校では、縁故就職でも何でも、就職を決めてもらうことが最も大事という風潮もあるかもしれない。しかし、貧困を断ち切り、長く自立して生活していくためには、堅実な職業観や将来展望が必須のものであることはいまでもない。こうした点で、貧困の問題は、特に底辺校と呼ばれる高校においては、その進路指導の在り方に大きな影響を及ぼすものである。

(4) 学校の対応の難しさ

貧困の問題は進路選択だけでなく、学校に通うことそのものにも深刻な影響を及ぼす。高川先生の経験した以下の事例は、日本の貧困の深刻さを物語るものである。その高校生は祖母と父親という構成のひとり親世帯である。日常のお金の工面は祖母が行っており、高校入学を期に野球を続けられるよう、祖母はグローブ代3万円を工面していた。ところが、その3万円は父親がパチンコに費消してしまう。その後、その子は教室内で

窃盗を働くというものである。この事件をめぐる学校の対応について、高川先生は次のように述べている。

もう学校もどうしたらいいかわからない。で、もうやめさせるとか、もうちょっとみんなで頑張って、やめさせたところでどうなんるんやって。もうそういう道に走って、そういう子どもに学校がなかったらどないなるんやって。もうちょっと面倒見たほうがいいやないかと。面倒見るって言ってもきりがないし、そこにつけこんでまた学校に来て厳しくさせる気はなかったと、こんな状態でどうするって、学年主任はすごい悩んでた。まあ、最後は本人と話し込んで、退学っていう形になったんですけど。

決して高校が安易にその高校生を退学にしたわけではないこと、ひとりの高校生の行為とその家庭的背景をめぐる、学校に大変な葛藤がもたらされたことがよくわかる。

さて、こうした状態を生み出した背景として、高川先生は次のように述べている。

そういう人たち（児童相談所など福祉機関）って、学校の側に情報提供を求めるくせに、僕らには情報を出さないんですよ。（中略）ここが手をつながなあかんちゃうのみたいなね。（中略）もっとこう早い段階で情報を共有して、お互いのできることももっとあったんじゃないかなって思ってますけど。

教育機関と福祉機関の連携不足が今回のような事態を招いた遠因であると指摘している。

その一方で、学校側も、何とか福祉機関と各家庭とを連結しようと試みてみいる。たとえば、篠川先生の務める私立高校のある県では、県に申請すれば校納金が安くなるという制度がある。篠川先生の学校ではこうした家庭に対して書類を持ってくるよう連絡を欠かさないが、それでも書類を持ってこないという。ここでは、学校が主体となって、行政機関や福祉機関との仲立ちを試みているが、逆に各家庭が要因となってその連携が阻まれている。この場合、いくら学校と福祉との連携が制度的に確立されたとしても、また、長谷川（2015）が指摘するような、学校内部に存在する阻害要因が除去されたとしても、その連携が効果を発揮するということはむつかしいだろう。

3. ひとり親世帯に対する教育的支援の在り方

以上、現職の先生方のお話しから、現在の高校でひとり親世帯の子どもがどのような

位置にあるのか概観した。お話しを通して、彼・彼女らを支援するために学校は何ができてくるのか、あるいはどのような課題があるのか考えてみたい。

まず、基本的な生活習慣を学校がどこまで教えるのか、という問題である。これは何もひとり親世帯の子どもに限った話ではないが、先生方の印象通り、ひとり親世帯においてその未確立が顕著であるならば、やはり社会的に支援する方策を考えるべきだろう。ただしこの問題は、高校というよりも、就学前教育や小学校教育の問題という色彩が強い。日本の学校教育には学習以外の様々な活動がすでに内包されている（たとえば給食の時間など）。こうした活動をより積極的に利用することが考えられる。

一方高校教育にとってより重要なのは、自立に向けた適切な職業観を育成できるかである。これもひとり親世帯に限った話ではないが、ひとり親世帯の子どもが貧困にさらされやすく、それ故に適切な職業観や金銭感覚が形成しにくいとするならば、ひとり親世帯の子どもに対する支援の問題でもある。現代社会における職業の構造、労働者の権利、労務管理や福利厚生の実態、社会保障制度の概要、家計の現状、ローンや消費者金融の問題など、高校でも教えられる、あるいは教えるべき内容は多々ある。キャリア教育の一環として、こうした諸問題を取り扱うことも必要だろう。

最後に、教育機関と福祉機関の連携という問題がある。現在、学校と地域の連携が声高に叫ばれているが、高川先生という言葉にあったように、学校現場の実感としては、連携がうまく取れていないようである。確かに個人情報保護の問題や管轄する設置者が異なることなど連携を阻む要素も多々あるが、ともに子どもの健全育成にかかわる機関として、情報共有を密にすることはすぐにでも可能である。一方で、篠川先生が指摘するように、学校側が行政機関や福祉機関と各家庭を仲立ちしようとしても、家庭の側が積極的に利用しない、事務手続きを怠るという側面もある。なお、高川先生によれば、入試ではじかれないう、中学校からも問題のある生徒の情報はあまりあがってこないそうである。教育機関と福祉機関だけでなく、教育機関同士、学校と各家庭との連携や情報共有の在り方も再考する必要がある。

参考文献

- 長谷川裕 2015 「学校教員は『子どもの貧困』をどのように把握し、それとどう取り組もうとしているか」日本教育社会学会第67回大会課題研究Ⅱ配布資料
- 小船井秀一 2009 「新潟県高等学校教職員組合の『希望奨学金』のとりくみと現状」『教育と文化』第57号 90-96頁
- 盛満弥生 2011 「学校における貧困の表れとその不可視化 - 生活保護世帯出身生徒の学校生活を事例に - 」『教育社会学研究』第88集 273-293頁
- 油布佐和子 2015 「教師のパースペクティブ—個人化・脱政治化・脱専門職化—」日本教育社会学会第67回大会課題研究Ⅱ配布資料